

石川達夫著

『チェコ民族再生運動』

多様性の擁護，あるいは小民族の存在論』

岩波書店，2010 年（ix+510 頁+15）

三 谷 恵 子

本書は、『マサリクとチェコの精神』（成文社 1995 年）の著作や、マサリクの大著『ロシアとヨーロッパ』（長與進との共訳，成文社 2002-2005）の訳書，近年ではヤン・パトチカ『歴史的哲学についての異端的論考』の翻訳（みすず書房 2007 年）などで知られ，数多くの論文においてチェコの歴史・思想・文学について幅広い論考を展開しているチェコ研究の第一人者が，チェコ民族再生運動という，スラヴ学に関わる者にとって関心を引いてやまない問題を全面的に扱った著書である。

前著『マサリクとチェコの精神』で著者は，副題を「アイデンティティと自律性を求めて」として，チェコの歴史に現れた人々の思想や行動を分析し，そこにマサリクという一人の卓越した政治家の思想を照らし合わせることでマサリク本人，そしてまた同時に彼によって具現したチェコの精神史の軌跡を描いて見せた。その中でも重要な構成要素であったチェコの「民族復興運動」（前著の表現）をあらためて主題に据え，その前段階から完成にいたるまでの過程と背景，さらに後の時代への影響を，民族文化の発展という流れにおいて解きほぐしたのが本書であるといえるだろう。本書の特徴は，その解きほぐしの作業において，この歴史的出来事の中で重要な役割を果たした人々の言葉をたんねんに拾い出して読者の前に提示し——著者によれば「当事者の内なる声に耳を傾けつつ」（57 頁）となる——それらに見られる時代性や相互の関連性を指摘しながらチェコという文化の継承性を浮き彫りにしている点にある。そしてその手法と，それによって描き出される歴史の全体像ゆえに本書は，史料の分析に基づく過去の再構成という意味の歴史研究あるいは歴史叙述の域を出て，あえて“歴史”という語に結びつけて評するなら，ある民族の歴史性の研究ともいえるべき人文学的考察となっているといえるだろう。

本書では，“白山の戦い”以後ほとんど沈黙していたチェコ人たちが自分たちの言葉を取り戻し，その言葉によって自らを主張し始め，さらにその自己主張をより広い文化の文脈において増幅して行った過程が時代を追って明らかにされる。ここで扱われることがらは言語や文学はもとより演劇，音楽，美術，哲学といった分野におよび，それぞれの章は単独に読んでも興味深く，いずれも著者の広範な学識と，研究領域の広さを示すものとい

えようが、そうした中で著者が、スラヴの少数集団であるソルブ人の存在を視野に入れ、チェコとソルブの関わりという視点から一章をたててソルブの問題を論じていることは、本書の副題が「多様性の擁護、あるいは小民族の存在論」とあることから注目にも値すると思われる。

本書でソルブ人について詳しく述べられているのは第6章である。そこではチェコとソルブの古い繋がり、また第一次大戦後に存在したソルブ人居住地のチェコへの領土的併合の可能性とその失敗の歴史が示される。ソルブ人は三十年戦争の時代までチェコ人と同じチェコ（ボヘミア）王領の民であり、領土的に切り離された17世紀中葉以後も同じスラヴ民族としてチェコと関係を持ち続けた。両者の関係は、少数集団であるソルブ人が歴史的にも縁が深く文化的に先んじたチェコに頼るという形で成り立っていただけではなく、チェコ人たちにとってもソルブの存在が些末ではない関心事であるという形で成り立つものであり、その関心度は、マサリクをして「ソルブ人自身が望むならソルブはチェコに統合することができる」と語らしめ（340頁）、あるいはソルブ人自身以上にソルブ人の運命に心を砕き政治的に奔走するチェルヌィーのような人を生み出すほどのものだったのである。だが一体なぜチェコにとってソルブの問題がそれほどの関心事となり得たのだろうか。少数者がより大きな者に頼るという構図は一般的にそう不思議なことではないが、その逆が起こるためには、何かそれなりの理由なり事情があるはずであろう。この疑問に対する答えはじつは本書が描き出すチェコ民族再生運動そのものの中にあると理解されるが、それについて述べるまえに“チェコとソルブ”の関係に関して以下の二つの事項を、本書に補足しながら確認しておきたい。

その第一は、本書でも指摘されているように、ソルブ社会が17世紀以後宗教的にカトリックと福音派（プロテスタント）に、さらにナポレオン戦争後は領土的にザクセンとプロイセンに分断され、その中で形成されたソルブ文化のほぼあらゆる面に“ソルブ”と一括りにできないような錯綜した状況が含まれるようになったということである。このことは、ソルブ社会について何か言及する場合——たったいま評者自身も“ソルブ社会”と用いたように——つねに一定の留保をつける必要があることを含意し、現下の文脈でソルブ社会とした場合には、それはまず三十年戦争以後カトリック教会圏に残り、かつ19世紀以後ザクセン領として残るラウジッツ一帯に住むソルブ人たちを指示するものとなる。そしてこの範囲でとらえた18世紀のソルブ人にとっては事実、チェコのイエズス会派の施設——そこで中心的な役割を果たしたのがプラハのソルブ神学校（本書では335頁に述べられている）である——がソルブの言語文化を担い、教養を身につけることのできる唯一の場であった。本書（336頁）に言及されているティツィンもプラハに学んだイエズス会士であり、彼の『ヴェンド語の基礎』はそれに先立つ1670年頃に作られた『ボヘミア

語基礎初論』を範としたものだった。¹ ティツィンがゆかりの人々に送った書簡の中には、本書1章で詳述される『チェコ語の擁護』の著者バルビーンについての言及もあるといわれる。こうしたプラハカトリック教徒ソルブ社会という紐帯が後に民族再生運動によって力を得たチェコ文化とソルブ社会との関係に引き継がれ、19世紀初めにソルブ人の間にも民族覚醒運動——初め上ソルブ人の中で起こり遅れて下ソルブ人の間にも起こった文化運動——を引き起こす一つの動力となったといえるだろう。“チェコとソルブ”とした場合、まず両者のこうした歴史的結びつきの流れをふまえておくことが重要である。

第二は、ソルブ人の言語文化の発展においては、ドイツの福音派（プロテスタント）教会やライブツィヒなどに設けられた教育機関もまた18世紀までは少なからぬ役割を果たしていたという事実である。ドイツ人からの福音派ソルブ社会への支援という文化的関係は、19世紀プロイセン時代のドイツ化政策のもとでほぼ消滅してしまったが、それより先の時代には、カトリック教徒ソルブ人たちがチェコ人の中に良き師を見いだしたように、福音派下ソルブ語話者たちがドイツ人の中に良き師を見いだすことのできる状況も存在したのである。18世紀に現れた“ソルブ語の擁護”に言及して著者もドイツにおける啓蒙主義の影響を指摘している（339頁）が、いま述べたことをただちにこの指摘に関連づけるなら、たとえば1761年に『下ラウジッツ＝ヴェンド語文法』²として本格的な下ソルブ語文法書を上梓したJ.G.ハウプトマン（1703-1768）や、主著『古スラヴ人の起源、習慣、しきたり、考え、知識についての考察初論』³でスラヴ人への深い関心を示したのみならず、下ソルブ語方言についての著述を数多く行い、ドブロフスキから“われらスラヴの友”と呼ばれたK.G.アントン（1751-1818）⁴などを、まさに啓蒙時代のソルブ人のよき師たるドイツ人として挙げることができる。したがってこのようなドイツ人の存在を、「啓蒙主義的観念に従った宗教的寛容、思考の自由、社会的公正」（140頁）を精神とした特定の時代の個性に還元されるものと位置づけた時にあらためて、民族再生期以後の時代にもチェコ人の中に維持されたソルブへの関心の特殊性、著者の述べる「スラヴの相互交流」（331-332頁）の意味がより明らかになるといえるだろう。

以上に確認したことをふまえて今一度、なぜチェコにとってソルブの問題が関心事であったのかという問いをもって本書に立ち戻ると、先ほどの繰り返しになるが、じつは本書

¹ Jacobus Xaverius Ticinus, *Principia linguae Wendicae quam aliqui Wandalicam vocant* (Prague: 1679), Fotomechanischer Neudruck mit einem Vorwort von Frido Michalk (Bautzen: Domowina, 1985), pp. 18-19.

² Johann Gottlieb Hauptmann, *Nieder-Lausitzsche Wendische Grammatica* (Lübben: 1761), Fotomechanischer Neudruck mit einem Vorwort von Helmut Faßke (Bautzen: Domowina, 1984).

³ Karl Gottlob Anton, *Erste Linien eines Versuches über der alten Slawen Ursprung, Sitten, Gebäude, Meinungen und Kenntnisse* (Leipzig: 1783 (1. Teil), 1789 (2. Teil)), Fotomechanischer Neudruck mit einem Vorwort von Paul Nedo (Bautzen: Domowina, 1976).

⁴ *Ibid.*, p. xxxv.

の主題たるチェコ民族再生運動そのものに答えが含まれていることに気づかされるのである。本書に従って理解するならば、チェコ民族再生運動とは、自らの脆弱さあるいは不確実さを自覚し、その理由や意味を問い、それを克服しようと試みたチェコ人たちが自分たちの文化を再生——もしくは“再生”という名の下に創成——した過程であった。であればその過程の中で、チェコの覚醒者やその流れを引く後の時代の知識人たちが、ドイツ文化に圧倒されてきた過去の自分たち、もしくは将来再びそうなるかもしれない自分たちの姿をソルブ人の中に見いだし、それに対して「助力を与えようとする志向」(331頁)を持ったのはごく自然であったのだと理解することができる。自民族に対する不確かさの自覚は、チェコの民族再生運動の中にスラヴ主義的思想を生み出し、それはもちろんソルブへの関心に連なるものにもなっただろう。しかし、より大きな繋がりを求めようという拡大志向のスラヴ主義が退潮し、チェコ人の民族的自立が志向されるようになった後にもソルブへの関心が残ったのは、ソルブの問題がチェコ人自身の存在理由に関わる本質的なものを含んでいたからであった。マサリクは偏狭な民族主義を批判しながらも民族の精神、小民族の存在を価値あるものと認めたとされるが、その『チェコ問題』とは、小民族の存在の根拠と意味をめぐる問題だった」(387頁) マサリクにとっても、ソルブの存在は、チェコ問題に重ね合わせて意識されたものだったとも考えられるのである。

本書で私たちは、ドイツ文化に圧倒されるチェコ人たちが自分たちの言語を擁護するためにしばしば“多様性”について言及したことを教えられる。大集団への同化に抵抗する少数者として多様性の意義を主張してきたチェコ人たちが、やがて力を得て自分たちの愛郷心を政治的・制度的領土への要求に変質させながら排他的になっていき、それはまたソルブ人への擁護を不徹底なものに終わらせることになったと著者は指摘する。ソルブの問題に関しては、もちろん“チェコ側の責任”というだけではとうてい済まされない事情を含んでいたのだが、実に“多様性の擁護”とは、きわめて排他的なものに変質しうる諸刃の剣のようなものでもあることを痛感させられる思いである。

著者自身が「世界の文化のあり方を考えようと試みる探求の書」(37頁)としているように、本書は、世界の多様性の危機が指摘されている今日、スラヴ研究の領域のみならず、広く人文学に携わろうとする者が考究すべき多くの課題を示唆している。